世界思想社
1,900円＋税

独立の時代
―アメリカの古典文学は語る―

林以知郎（大学文学部教授）、入子文子編著

アメリカは、この10年ほどの間に9・11同時多発テロやイラク戦争を経験してきた。その建国以来の歴史において、国家的権威を揺るがされるような局面に遭遇した時、いつも国家としての存在意義を再確認するナショナリズムの高揚が見られる。「一つのアメリカ」を標榜して勝利したオバマ大統領の選挙戦略のレトリックはその一例である。こうしたアメリカの国家総体の再確認の動きの中で出版されたのが本書であり、まさに時宜を得た企画である。

建国期から現代に至るまで、アメリカの作家たちは多かれ少なかれ「アメリカ」と自分との距離を測りながら作品を創出してきたといえる。それはアメリカという国が、旧世界に対して自由や平等を掲げた建国理念によって成立した、ベネディクト・アンダーソンの言う「想像の共同体」であり、作家個人の参与の仕方がそれぞれの作品世界に投影されているからである。本書はこうしたアメリカニズムとの関係性の中で、建国期から19世紀までの文学テクストを読み解く論文集である。

白川論文は初代大統領ジョージ・ワシントンの数多ある伝記の中からウィームズの伝記を取り上げ、林論文は建国期文学のキャノンであるクーパーを取り上げ、アメリカの起源の継承と書き直し、つまり独立革命の大義への共感・称賛と不安・疑義を見事に浮き彫りにしている。文学テクストにおけるアメリカ的想像力のダイナミズムを解明した好著である。

石塚則子（大学文学部教授）

藤原書店
8,800円＋税

言語都市・ロンドン
1861―1945

真銅正宏（大学文学部教授）、和田博文、西村将洋、宮内淳子、和田桂子著

書を片手に旅に出よう！――読み終わった途端、この本を片手にすぐにロンドンへ出かけたくなる。本書はそんな気分にさせてくれる本である。

本書では近代日本人の様々なロンドン体験が描き出されており、私達は彼らの見たロンドンの多様な顔を見ることができる。

例えば、往事の〈異邦人〉（日本人）達が交わしていた「とりあえず常盤」という言葉。これは日本料理店常盤が「多くの日本人の心や腹を満たした」という事実を伝えてくれており、ロンドンにおける近代日本人の日常生活の一端を垣間見ることができる。また、現在では熊で有名なパディントン駅も、かつて島村抱月が見送られた駅であるなど、著名人のロンドン体験を身近に感じとることもできる。この他、ホームズ物を初めて日本に紹介した水田南陽の存在の指摘など、かつて活躍したものの今では忘れ去られてしまった日本人の活動にもスポットがあてられており、興味深い。

地図や「ロンドン関係・出版物年表」が付されていることも、本書の魅力の一つである。私のように現地に行ったことがない者にとって、地図は位置関係を把握する上で大変有り難い。年表も当時の流行などが素早くわかり、作品を読む上での一助となる。

ロンドン全域を網羅し、そこに秘められた近代日本人の様々な体験エピソードを共有できる1冊。ロンドンの案内書として、また研究書として、絶好の書だといえよう。

西川貴子（大学文学部准教授）

誤解の理解
対話115例で解説するコミュニケーション論

井上智義（大学社会学部教授）編著

あいり出版
1,900円＋税

われわれは、日常生活の中で、ことばを使ったコミュニケーションに頼っている。しかし、誰もが経験するように、ときには相手のことばを誤解したり、思いがけず誤解を与えてしまうことがある。そのためか、誤解を与えないノウハウを満載したハウツー本や、より広くコミュニケーションの理論的側面を解説した学術書が、書店にあふれかえっている。確かに、ハウツー本は類似の状況では有用であるが、少し状況が異なると役に立たない。一方、コミュニケーションの理論に関する学術書は、深く理解すれば有用なはずだが、一般人にとっては敷居が高く、しかも、日々の状況に適用することは考えられていない。

これに対して、本書の特色は、ノウハウ的側面と理論的側面の両方をバランス良くもっているという点にある。とりわけ、ユニークなのは、コミュニケーションの理論を長く研究してきた編者が理論編というべき部分を平易なことばで執筆し、個々のノウハウに関連した部分はその分野の第一線の研究者に執筆を任せると同時に、理論的観点からのコメントを加えるという構成である。このことによって、本書は、単なる事例や理論の寄せ集めではなく、日常生活にすぐに役に立つハウツー本としても、コミュニケーションの理論を学ぶための学術書としても、統一のとれた読みやすい書物となっている。その意味で、誰が読んでも得るところの多い書物であるのは間違いない。

高橋雅延（聖心女子大学文学部教授）

身分犯の共犯

十河太朗（大学司法研究科教授）著

成文堂
6,500円＋税

日本の刑法は、施行から100年を経た今日でも、解釈上の課題を数多く抱えている。なかでも、犯罪に複数が関与する共犯は、その複雑さと難解さから「絶望の章」と評され、とりわけ「身分犯の共犯」に関する65条の理解については、学説上、混迷を極めてきた。本書は、多くの先人が取り組みながら、解決できなかったこの難題に挑み、新しい解決策の提示に成功したモノグラフである。

ここでいう「身分犯」とは、収賄罪の公務員や常習賭博罪の常習者のように、行為者が一定の地位にあることで、成立したり、重く処罰されたりする犯罪を指す。この身分犯の共犯につき、刑法65条は、1項で「身分がない者も身分のある者に加担すると共犯になる」とする一方、2項で「身分がなければ、身分によって重い刑が科される犯罪では処罰されず、軽い刑で処罰される」とし、一見したところ、正反対のことを定めている。そこで、この両規定を矛盾なく解釈する方法が、長年にわたって探求されてきた。著者は、ドイツ、オーストリア、イギリスの刑法との比較検討をふまえ、わが国の判例・学説を詳細に洗い直すとともに、この問題を共犯の処罰根拠に立ち返って検討し直し、一つの結論を導き出した。その結論は、オリジナリティを有しながら、決して奇をてらったものではなく、むしろこれまでの議論の盲点を突いた説得力を有している。また、本書は、そうした結論の独自性・妥当性に加え、そこにたどり着くまでの丹念な考察でも、高く評価されている。

川崎友巳（大学法学部教授）

淡交社
3,800円＋税

秀吉の智略「北野大茶湯」大検証

矢野 環（大学文化情報学部教授）、竹内順一、田中秀隆、中村修也著

猿関白といわれた豊臣秀吉が、千利休に優るとも劣らない茶人であったことを知る人はあまりいないであろう。しかしそれは事実なのである。その秀吉が京都の北野天満宮を舞台に茶の湯の一大イベントを催したのが、「北野大茶の湯」であった。

時は天正15年（1587）10月1日、先月から予告していたように京都の公家衆や秀吉配下の武将たちは言うに及ばず、一般庶民に至るまで、多くの参加者が募られ天満宮とその周辺に併せて数百もの臨時の茶席が作られたのであった。秀吉自身も秘蔵の名物道具を一挙に公開するため、四つも茶席を設け、千利休など彼の茶頭たちに任せた。参加者達は籤をひいてこれらの席に入ったという。

この「北野大茶の湯」について大胆な検証を試みたのが本書である。田中秀隆「そもそも北野大茶の湯とは」・中村修也「北野大茶の湯の謎」・竹内順一「北野大茶の湯への序奏」・矢野環「新出史料から見る道具と茶席」・田中秀隆「北野大茶の湯の余韻」・矢野環「資料篇」の六部によって構成されている。執筆陣は何れも茶道史の第一線で活躍されている方達である。

とくに「北野大茶の湯」研究史のまとめ方と、資料篇については、読みごたえのある内容となっている。資料篇は現在の水準で可能な限り収集されたものとなっており、資料の散逸ということを考慮すると、今後このようなものが編まれることはないであろう。まさに本書は専門的であり、かつ入門的な書物といえよう。

山田哲也（大学文化情報学研究科博士後期課程、今日庵文庫主任）

世界思想社
2,000円＋税

現代哲学の真理論
―ポスト形而上学時代の真理問題―

吉田謙二（大学名誉教授）監修、加賀裕郎（女子大学現代社会学部教授）、隈元泰弘、立山善康共編

本書は、吉田謙二先生の古希を記念して、近現代の真理論をテーマに、いわゆる吉田門下の12人の俊英による論究を編集したものである。

本書は、その拠って立つアプローチの基点は異なっても、また、そこで扱われるテーマも多様であるが、真理をめぐるさまざまな問題やその所在への「問い」の鋭さとその「論究」の適切さは共通していて、読み応えのある論集になっている。本書の内容は、「真理は発見されるものから、作られるもの、生きられるものとなり、真理論の歴史は、真理を問うことの意味そのものを問うことへと展開してきた。」という主題のもとに、ロック、カント、ヘーゲルからローティ、フッサール、ヤスパース、ハイデッガー、デューイ、さらには、ポラニーといった近現代の哲学者の思想を論究して、まことに興味深い。

小生の専門は教育哲学であるが、本書は、教育の基底を考える上で、まことに刺激的であった。こうした論究は、教育の分野においても、哲学することの可能性を開示し、その未来を創造するものである、といえよう。それは、「教える」ことと「学ぶ・知る」ことの関係のダイナミズムを考えることに大きな示唆を与えてくれた。

山根耕平（神戸親和女子大学発達教育学部教授）

英宝社
2,400円＋税

擬装する女性作家
—十八世紀イギリス女性作家の戦略—

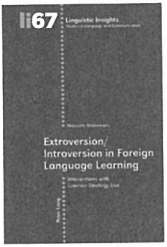
玉田佳子（女子大学学芸学部〈現在は表象文化学部〉教授）著

本書は、リアリズム小説成立に寄与したにもかかわらず、正当なイギリス文学史の範疇から消えてしまった18世紀女性作家の作品を掘り起こし、その文学的価値と魅力を論じている。その明快な論述において、筆者が採用している枠組は「擬装」である。

当時の女性作家は、男性中心の社会に受け入れられる必要性から、男性に都合のよい女性の美徳や行為から逸脱していないという「擬装」をまとい、実は、ひそかに女性の欲望や本音を描き、女性読者たちにサインを送り続けていたという。本書では、6人の女性作家の10作品の多様な擬装の手法（パロディ、書簡体、自伝、カウンター・プロット等々）が分析され、それぞれの作家のマグマのような本音やしたたかさや欲望が、鮮やかに顕在化されている。たとえば、スキャンダラスな生涯を自伝小説にして擁護しているドラリビエール・マンリー。教訓小説の枠組み自体を擬装に使っているメアリ・デイヴィス。一見保守的なマライア・エッジワースの技巧的で巧妙な筆づかい。このように、いくつもの作品が多面的に論じられて集まると、18世紀イギリスのヒロイン像が、様々にたち現れてくるが、彼女たちは一様にエネルギーに満ちあふれている。

「擬装」はこれで終りかと思っていたら、また作者の本音が表れたりして、学位論文となった研究書でありながらもスリリングに読める。時代背景にも目配りがきいている。この書は、日本におけるフェミニズム文学批評の数少ない優れた成果であり、イギリス小説研究にあらたなページを付け加えることであろう。

安達みち代（大阪府立大学教授）



Peter Lang版
$48.95

Extroversion/Introversion in Foreign Language Learning: Interactions with Learner Strategy Use

若本夏美（女子大学表象文化学部教授）著

本書は、日本人大学生による英語学習において、外向的／内向的という性格の違いがどのような影響を及ぼすかを、英語聴解能力との関連で議論したものである。研究動機は、日本における英語学習では、教室の内外でできるだけ多くの英語に触れることが必要で、学習者の性格上の違いがもたらす影響が大きいとする認識である。

本書のすぐれた特徴は、二つの観点で入念なデータ採取が行われていることにある。一つは性格と聴解能力の関係を、学習者がとる学習方略と伝達方略を通して把握している点で、もう一つは量的データと質的データの両方を用い、データの相互補完を行っている点である。

前者の観点では、個々の方略使用に関し、好み、有効性判断、以前の使用程度、今の使用程度に分けて尋ねており、認識上のことと実際上のことが区別できるようになっている。後者の観点では、学習活動を全体活動と班活動に分け、個人活動も加えて、それぞれを観察記録し、さらに再生刺激法によって追確認するという方法をとっている。

以上のことによって、性格上の違いによる方略使用の実態は、日本文化の特徴、教室文化の特徴、学習形態の違いのそれぞれの要因と性格との相互影響の結果を反映するという重大な事実が初めて明らかにされている。

本書は、その結論と研究方法論を学ぶ意味において、外国語学習における個人差を研究する人にとっての必読書である。

山岡俊比古（兵庫教育大学大学院教授）

塙書房
11,000円＋税

古事記神話の研究

寺川眞知夫（女子大学学芸学部（現在は表象文化学部）特別任用教授）著

『古事記』（以下『記』）神話の研究は多いが、その目的や編纂意図を見据えながら分析を展開するものは案外少ない。本書は、『記』の神話が天武天皇の意向によって着手されたことを明らかにし（序章）、その意図が如何に具現されているかを解きほぐしてゆく。まず皇祖神としての天照大御神の形成と神々の体系を論じ、そこに天武の意図が反映していることを解明する（第一章）。次に、大八嶋国を根拠とする国の形成と大国主神による国作り・国譲りの具体相が分析され（第二章）、最後に、研究史上に議論のある天浮橋、黄泉国と根之堅州国、須佐之男命などの課題が解明される（第三章）。

以上の大筋に沿いながらも、神話的世界観（宇宙観）とその相互の関係、国生みを指令する神の問題、国生みと国譲りの神話的意義など、『記』の読解に不可欠な基本課題はおおむね扱われ、しかもそのつど本書の立場が示され、幾つかの新たな解釈が提起されている。

本書の特徴は、各章が互いに有機的に繋がり、内的に連係し合っていることである。それは分析に際して、常に著者のいわゆる神話素の分析と作品としての全体の読解との関係が、縦（歴史的、伝承的過程に関する側面）からも横（『記』の構成的側面）からも配慮されてなされているからであろう。「なぜ」、「どのように」構成されているのかという疑問を持ち読み進んでいけば、明快な答えが返ってくる、そんな印象を抱かせる好著である。

駒木　敏（大学文学部教授）

つむぎ出版
1,524円＋税

山宣譚（やませんものがたり）

―タブーに立ち向かう義の人の青春―

小田切明徳（元中学校教諭）著

今年（２００９年）は、山本宣治（山宣）の生誕１２０年・没後80年にあたり、その記念出版として本書は刊行された。山宣は13歳の時、病弱のため中学を退学して、園芸に興味を持ち19歳の時、カナダのバンクーバーに渡り苦学していたが、父の病気のため帰国する。

帰国後、１９１４年に同志社普通学校４年に編入し卒業後、結婚して第三高等学校を経て、１９１７年に東京帝国大学に入学し、妻子４人と東京で学生生活を送る。１９２０年に山宣は、性科学者となって東京帝国大学を卒業し、同志社大学予科講師となり、京都大学大学院に入学する。このころから、産児制限運動や労働学校に関わり、１９２６年の京都学連事件で同志社大学を退職せざるを得なかった。

『山宣譚』は３部作（１部「青春編」、２部「反戦平和編」、３部「性教育のパイオニア」）として構想され、本書はその１部で、山宣が同志社大学予科講師に就任するまでを描いている。

実は山宣の資料は、大学人文科学研究所が借受け、『山本宣治関係資料目録（上・下）』（１９６８年）を作成した。この目録が山宣研究の進化に役立ったことは、関係した一人として喜びに堪えないのである。著者は山宣研究を始めてから40年のキャリアをもち、山宣記念性教育研究室長、宇治山宣会顧問として、これらの膨大な資料を駆使して、平易で読みやすい文章で、山宣の青春時代を見事に描いている。

三・一五事件に抗議し、さらに治安維持法改悪に反対して、右翼の凶刃に倒れた山宣が描かれる２部、３部の刊行の早やからんことを期待してやまないのである。

太田雅夫（元大学人文科学研究所所員・前桃山学院大学教育研究所所長）